

資料紹介

唐山市賈格莊の戦国墓

金 関 恕

近年新中国で盛んに行われている土木事業にともなつて各地で多くの遺蹟が発見されたが、ここに紹介をこころみる唐山市賈格莊附近の遺蹟もまた、同村で村民が工業用・建築用の採砂を行つた際見出されたものである。一九五二年五月末より約一ヶ月を費した中国科学院考古研究所による発掘調査の結果、密集した戦国墓を主とするこの遺蹟の実態が明かにされた。

当遺蹟は、出土した遺品の豊富な点で李峪や金村の一括遺物に及ばぬとはいへ、學術調査によつて、従来ほとんど知られていなかった戦国時代墓制の一端がうかがわれる点に重要な意義を認むべきであり、更に、出土状態の明かな遺物は、この地方における当代文化の特質を示す資料としても、また、既知の遊離せる個々の遺品を位置づけるものとしても、重視されるべきである。

この調査は河北省東北部の工業都市として有名な唐山市、唐山駅から東北約四軒へだつた賈格莊附近の二地点で行われたが、賈格莊に対する関係位置から、一を東区、他を西区と呼ぶ。

東区

賈格莊の東南方に、東北から西南に走る路溝をへだてて狭長な台地があり、この北端の崖上に露出している六基の甕棺墓が調査された。採砂工事によつて破壊されたこの周囲一帯の地表に甕棺片が散乱していることから、このあたりはもと密集した墓地であつたことが推される。これ等の甕棺は何れも尺余の小型のもので、二三の副葬品（銅鈴・樹脂性虎形飾品——相似たものがかつて楽浪の漢墓で見出されている。——水晶珠）から見ても小児を容れたものであると考えられる。棺の主体をなす甕は紅褐色を呈する堅硬な質のもので、胎土には石英・白雲母・石英岩等の粗粒が含まれており、その大多数は繩席文を有し、腹部に残る烟熏の痕は、これが甕棺専用につくられたのでないことを示している。この甕の欠損した部分は別の灰陶系の陶片を以つて覆つている。西区の戦国墓の墳土中にこの種の土器片が混入している事実と、小官莊における調査の結果（これについては後の機会に紹介したい）とによつて、これらの甕棺墓が當まれた時期は春秋時代に相当すると報告者は推定している。

西区

賈格莊の西、賈家山の山麓にあたる地域である。この附近でも採砂工事が行われ、当遺蹟発見の端緒となつた陶片・銅器（嵌練狩獵文銅壺（図一六）はその際に出土したものである。ここでは、採砂によ

る破壊を蒙らなかつた二五〇平方米の地域にわたつて幅二米の長いトレンチが一米間隔で入れられ、その結果三六基の墓が見出された。この中、八基の前漢墓、三基の後漢墓及び時代不明の三基の墓を除いて、大多数が戦国墓であり、おおむね戦国墓は発掘地の北半に密集し、漢墓は南半に分布しているようである。現在この地域では厚さ一・五米乃至〇・二米の表土層が相当厚い細砂層を覆つている為に、堅穴の構造をもつこれ等の墓は比較的浅く表土層中に造られており、墓地造営当時よりも地表が低く削られたので、特に浅い一部の墓は破壊を免れなかつた。従つてこの地域一帯にはもと稠密に墓が営まれていたことが察せられる。

さて、この中の戦国墓は、ほぼ南北方向を向いた長方形の堅穴を穿つて造られ、墓道はない。総じて小型であり、最小のものは、墓室の長さ一・五米、幅〇・五米、最大のものでも長さ五米、幅四・二米をこえるものはない。構造上墓室の内に更に柳室を掘りこんで設けたものと、これを缺くものとの二類に分けられる。棺内の人骨の保存はよくないが、これが示すところによれば、被葬者の数は大体一墓一人宛であり、稀に二人を合葬した例もある。又その多くが伸展葬の姿勢をとるが、中には少数ながら屈葬例も見られ、特に前者を容れた棺痕が狭長であるに比して、後者のそれは短いことが注意される。副葬品の数量は墓によつて一定してないが、概して墓

室の大きいものには多い。棺内に入れられた二、三の利器・装身具を除いて、副葬品はすべて棺外にあり、柳室のある墓は棺と柳の間に、無柳のものは棺と墓壁の間におかれているが、後者の或るものでは墓壁に籠を設けてこの中におさめられている。副葬品の配列に一定の規律はない。

これらの副葬品の品目として、陶器・銅容器・銅利器・装身具・車馬器・雑器・石器の類が挙げられる。

陶器には灰陶系のものが多く、質の硬い一部の他は明器として作られたもので、甕・尊・罍・壺・豆・鼎等各種の器形にわたつており、この中の壺・豆・鼎等は銅器の形を模したものである。灰陶系のこれらとは別に、器面を研磨し、胎土に粗な砂粒を含み、紅褐色乃至黒灰色を呈する一群の陶器があり、陶質と繩蔴文を有する点から東区甕棺の主体をなすものと同じ系統に属すると考えられる（以下粗陶系と呼ぶ）。西区出土の陶器全般については、これらが戦国時代の中原文化の範疇に属するとはいうるが、一方灰陶系の尊・小口の甕・豆・鼎の中で、中原文化の影響を受けながらもやや異つた特色を示すもの、又粗陶系の双耳のついた甕・鼎（図一、三）の類で他の地方で見られぬ独特の形式を示すものがあり、これ等はこの地方の地域性を考察する上に今後注意されるべきである。

銅容器は総計二点を救え、主として後述の三墓から出土したも

のであるが、鑄造は精美であり、銅質も亦佳良である。燕・楚・秦・齊等の広大な地域から出土する戦国時代の銅容器は総じて時代的な共通性を示しているが、しかしその中には夫々の地域の特性も反映しているわけであり、これらの精密な分析と、今後の資料の増加によつて地方的特色がとらえられよう。猶、個々のものについては後に触れたい。

銅利器としては、錐一・鏃七・刀八・劍九・戈五・戟一・鏃六〇が挙げられる。この中劍については、その茎の形が円柱形をなすもの、円筒形をなすもの、長条形のもの、三類に分たれるが、上二者はその形が周礼考古記に謂う中制の劍と一致するのに対し、長条形の茎を持つものは考工記の記載と合致せず、しかもこの類が当遺蹟出土の銅劍中の大多数を占め、しかも他の地方での出土例があまり知られぬところから、おそらく特にこの地方で一般に行われたものであらうと考えられる。戟はそれぞれ独立した矛と戈がこの形に組合わさつて出土したことから、秘の腐朽によつて別々になつてはいるが本来は戟として使用されたと推されるものである(図一〇)。鐵は、殷周代に行われた形式を襲つたと思われる翼の広い形式のもの、尖の円い形式ものと共に戦国時代に新形式として登場する細い、断面が三稜形をなす形式のものが並び用いられているが、第一に挙げた形式のものが最も多い。

その他装身具としては、帶鉤一一・瑪瑙環三・玉・骨環等が、車馬器としては、車軸頭二対・馬銜・轡飾等が、雜器としては、明刀・銅環・工具と考えられる銅棒三（一端が楔形をなし、長さ四、五種）・用途不明の三稜小銅器三・車蓋の爪三六・用途不明の玳形小銅器一・同じく用途不明の螺旋形をした鉛若干、石器としては、いくつかの磨いた石片が挙げられる。

次に、これ等の墓の中特に副葬品の豊富な三墓を選び、それぞれの副葬品とその組合せを示したい。

「第一六号墓」 墓室の長さ二・九四米、幅一・五四米、深さ二・二米。墓室内に槨を設けず直接棺をおき、被葬者の人数・姿勢は不明、墓室の兩壁には墓底から一・一五米の高さのところ長さ一・五四米、幅〇・五米の甬が設けられその中に副葬品をおさめている。陶器 灰陶系で硬質の小口の甕一・罍一・やや軟質の壺二、この中の一は獸面座を有し(図六)、他は絃文がめぐつている。繩席文ある粗陶系の鼎二(図三)、双耳のついた甕一(図一)。

銅容器 敦一(図四)、橢円球形の器身と半球形の器蓋よりなり、器身には繩索文を附した三足をつけ、器蓋にも足と同形の三鈕がある。器身、器蓋共一種の三角文が一周し、器蓋の中央には繩索文及び雷文をめぐらした円形渦文がある。(盒一、棺内にあつたもので、器身は円筒形丸底で文様なく、器腹と底部に絹布の痕が残つ

ている。

其の他 刀片・劍一(図五)・戈二・鏃八・帶鈎二・珖形小銅器一、

これは前述の銅盒の内に容れられていた。青灰色の砂岩でつくつた長条形の磨石一・骨環一(図二)。

「第一八号墓」 墓室の長さ五米、幅四・二米、深さ一、四四米。

槨室の長さ三・三米、幅二・三六米、高さ〇・二四米。槨痕は不明瞭であり、被葬者の人数、姿勢は不明。この槨槨の間と推定される所に副葬品がおかれていた。

陶器 灰陶系の硬質素文の尊一。

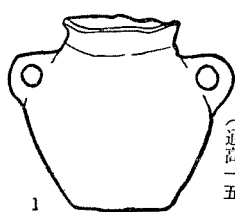
銅容器 銅盤一(図一一)、比較的浅い円形の鏝身、高い圈足、耳よりなり、鏝身の外側には一帯の陶文と斜方格雷乳文が一周し、内側には中央に三つの双獣互咬円形文があり、その外を四つの龍形文が、更にその外を六つの獸形文がめぐり、口縁の上には純銅の菱形文が一五嵌入されている。圈足の外側には一帯の獸首蟠螭文と一種の繩索文がめぐり、内側には鑄范の粘土が残存し、耳の上には鑿鏝が鑄出されている。銅壺一、破損甚だしく復原不能であるが形はさきに挙げた嵌銀狩獵文壺に似ており、文様はない。銅豆一(図一二)、器身、脚、器蓋はすべて純銅の幾何学文獸形文が嵌入されている。銅鼎一(図一五)、器身、器蓋に蟠螭文がめぐり器蓋の中央に円形渦文があり、耳には鑿鏝及び蟠螭文が鑄出さ

れている。鼎内には頭部を取り去つた一体の小豚の骨格が残存していた。匱一(図一四)、器身は楕円形、流に鳥首をつけ、水を注ぐ為に器を傾けたときこの喙が開くようになっている。流内には鑄范の粘土が附着している器身の内側には流と方向を一にした一對の鴨形文が並び、流と反対側に鑿があり、その上端にも鳥首がつけられ、脚の上端には鑿鏝が鑄出されている。罍一(図二三)、器体は楕円形で器身・器蓋に細蟠螭文を入れた結紐繩索文がめぐり、高い圈足上に一帯の細文がある。

其の他 銅勺一・銅錐一・銅鏃三・銅劍一・銅戈一・銅戟一・銅鏃二四・車蓋の爪九、出土状態から見て槨の上面におかれたと考えられる。銅鏃二・帶鈎一・馬銜二・轡飾二・車軸頭二、この外側には渦形索文が二周している。これと馬具の出土状態から見て、一車両馬の副葬が明器的な意味で表されているようである。三棧小銅器一・小石片六、青白色の石灰岩を磨いて作つた薄い長方形の石板で、出土状態から見て本来は槨槨の上におかれていたらしい。「第二八号墓」 墓室の長さ三・八米、幅三・一米、深さ一・二六米。槨室の長さ二・九四米、幅二米、高さ〇・七六米。槨痕は不明瞭で被葬者は一人、姿勢は屈葬。槨槨の間と推されるところに副葬品がおかれていた。

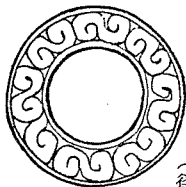
陶器 灰陶系の硬質素文の尊一。

第一六号及び第二八号墓主要出土品



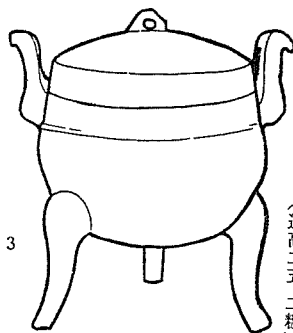
1

(通高一五、五釐)



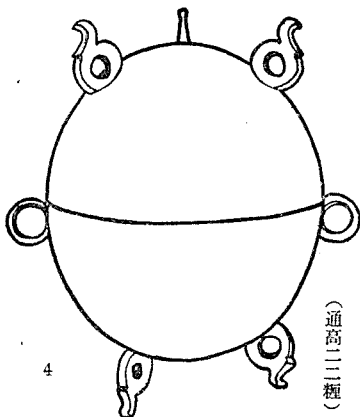
2

(径四三釐)



3

(通高二五、二釐)



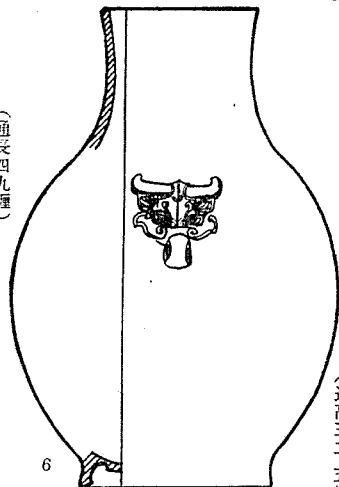
4

(通高三三釐)



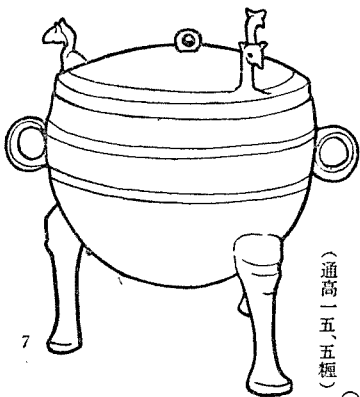
5

(通長四九釐)



6

(通高三三、五釐)



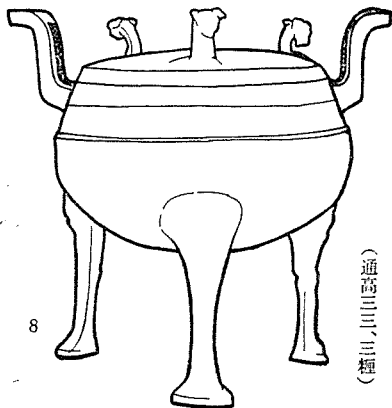
7

(通高一五、五釐)



9

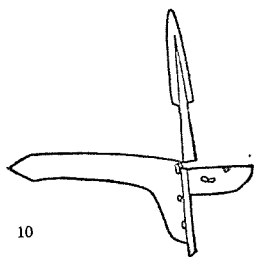
(通長二四、七釐)



8

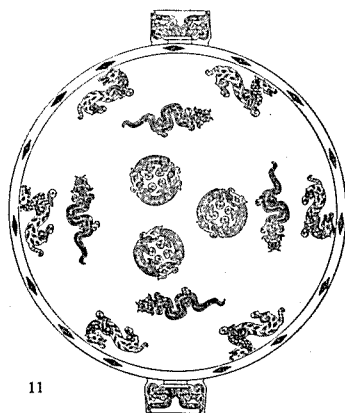
(通高三三、三釐)

第一八号墓主要出土品及び調査前出土の狩獵文壺



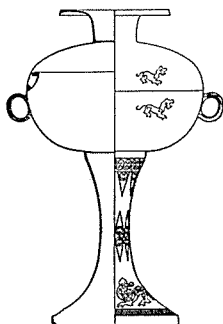
10

(通長二七、五種)



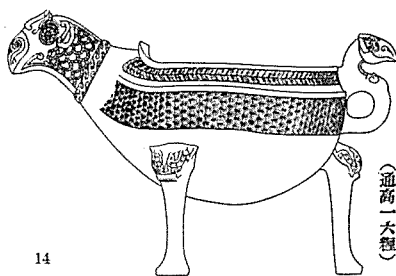
11

(徑三五、一種)



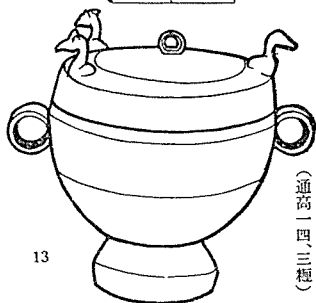
12

(通高三五、三種)



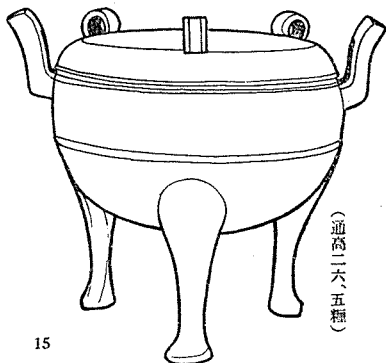
14

(通高一大種)



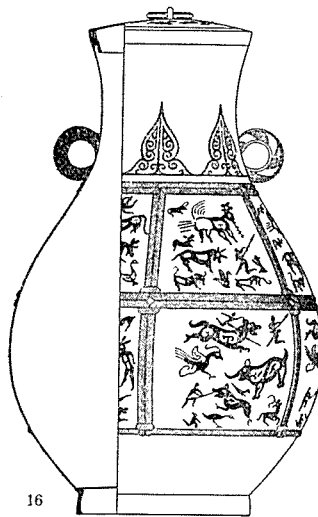
13

(通高一四、三種)



15

(通高二六、五種)



16

(通高三四、九種)

銅容器 豆一、細部の差を除いては第一八号墓出土のものと同じである。鼎二、一（図八）は正面に饜饗を鑄出し、器腹に一帶の蟠螭文及び繩索文をめぐらし、細長い脚の上端にも饜饗がおかれ、これらの文様の空隙には黒色の物質が填められている。この鼎内にも頭をとり去つた小豚一体が入れられており、器腹に烟熏の痕が残つている。他の一鼎（図七）は楕円形の器体で器身に一帶の細蟠螭文と三角蟠螭文がめぐり、器蓋には、鑲鈕を中心にして細蟠螭文帯をはさんだ二条の繩索文がめぐつている。

其の他 銅鏃四・銅刀一（図九）・銅劍一・銅戈一・銅鏃七・銅鏃四・車蓋の爪一八・銅鑲一二、これは本来車蓋の爪についていたものであろうがここでは別々に出て来た。帶鈎一・馬銜二・車軸頭二、形式は第一八号墓出土のものと大体同じであるが外側にT形文がめぐつている。三稜小銅器一・螺旋形鉛若干・小石片五。

これ等の出土品を通観したところ、多少時間的な前後はあるにしても西区の戦国墓は大体一時期に営まれたと考えられよう。特に当遺跡出土の銅容器の形態・文様を従来出土地の知られた戦国時代の一括遺物と比較した場合、李峪出土の一群と最もよく似ていること、又当地出土の狩獵文壺が春秋戦国間の時期に比定されていること、杵氏壺とある程度類似していること、更に当地の蟠螭文・繩索文・凹形渦文が新鄕出土銅器のそれに比してさほど差異が認められぬこ

と等から推して、安志敏氏はこの墓地の营造年代を戦国時代の初頭においている。それ故、これ等の示す特色は当時この地が燕の領域であつたところからそれとの關係において考えらるべきであり、今後の調査と研究によつて、中原の文化と対比したこの地方の文化の特性が、より明確に究明される日の近いことが期待されている。

なお西区ではこれと同時に八基の前漢墓と三基の後漢墓が調査された。前者は戦国墓と相似た構造をもち、その中の三基は棺内に五銖銭を容れ、後者は堅穴の床と柳壁に磚を用いたものであるが、破損の状態が甚だしい為に天井の構造は不明であり、出土した貨泉・大錢五十から推して、新よりやや下る年代のものと考えられている。これらについては紙面の關係から詳しく蝕れ得なかつたことをお断りしたい。

本稿は中国考古学報第六冊（一九五三年十二月）所載の、発掘者安志敏氏による「河北省唐山市賈格莊發掘報告」を簡略に紹介したものである。